



横倉山修験道の行場・住吉

横倉山の旧名「三嶽山」の由来である三つの嶽（岳：ごつごつとした山・岩場）の内の一つに「住吉」という断崖絶壁の岩場がある。石英斑岩と呼ばれる火成岩（半深成岩）から成り、二酸化ケイ素（ SiO_2 ）に富むため風化・浸食に強いため嶽として残ったと思われる。

「馬鹿試し」の南西対岸にあり、他の二つの嶽と同様、かつて800年以上も昔の横倉山修験道の主な行場の一つで、現在もその名残りとして、鎖禪定に使った鉄の鎖が急な岩場に掛かったまま残っている。最初の長い一の鎖（約24尺）を降りて、鞍部からさらに短い二の鎖（約4尺；何年前になくなってしまった）を登って岩場の先端に行くようになっている。一の鎖の一つ一つには寄進者の名前が刻印されており、名前のみで姓がないことから、少なくとも、『平民苗字許可令』が出された明治3（1870）年以前の、恐らく江戸時代のものではないと思われる。岩場の先端は目もくらむような断崖絶壁になっており、恐らくここからかつて修験者たちが捨身行を行っていたことが想像される。住吉の頂上には、住吉大神と安徳天皇の陵墓（参考地）を取り囲むようにして存在する従臣たちの墓の一つである、花山院中納言兼政を祀る小祀がある。

住吉で見られる花をつける植物としては、シコクママコナ、アサマリンドウ、ケイビラン、オンツツジ、ドウダンツツジなどで、断崖の下にはアケボノツツジの古木が何本かあるという。また、空池との分岐点の石灰岩地には、カツラの巨木の他、絶滅していたと思われるミドリワラビ〔いわでんだ科：横倉山タイプ植物〕が最近牧野植物園の職員によってほぼ20年振りに確認された。

住吉からは、間に横倉山で最も深い谷・上流谷を挟んで、対岸の「馬鹿試し」の断崖（約80尺）の全貌が臨め、東方には越知市街地や遙か遠方には高知市街、太平洋をも臨むことができ、大変眺望のいい所である。

カプト嶽から住吉までの尾根道（現「四国のみち」）は、紛れもなく横倉山修験道のメインコースであったと思われるが、それ以外のコースの全体像は不明である。通常の横倉山登山道の最終地点も、せいぜいここまでであるが、かつての修験者たちは、ここからさらに西に足を伸ばし、落差150尺ほどもある垂直な断崖絶壁に掛かる「地芳の滝（“幻の滝”）」の頂上（背後は100.9mの三角点ピーク）へと足を運んだものと思われる。

横倉山修験道に関しては、まだまだ未知の部分が多く、近い将来その全貌が解明されることを願いたい。



一宮大塚古墳 (現存)

“幻の巨大古墳” 一宮大塚古墳

安井 敏夫

かつて、『土佐の三大古墳』に匹敵する「一宮大塚古墳」(一宮二号古墳)と呼ばれる古墳時代後期の巨大古墳があった。現在の土佐神社(土佐一ノ宮)の南西国道32号を道なりに約300[㍎]の旧土佐郡一宮村一宮分字大塚(現高知市一宮)という旧街道沿いの地において、現在は個人(島崎歯科医院・島崎誠氏)所有の敷地内の一角にその一部が残っている。土佐一国の基本土地台帳である『長曾我部地檢帳』(16世紀後半)の中にも古墳にちなんだ「大ツカ」という地名(字名)として登場し、かなり象徴的なものであったと思われる。地籍は「一ノ冊代 出十代五分」、すなわち計四十代五分で、この当時は一代=六坪で243坪、検地竿は六尺三寸なので、一坪は六尺三寸角となり、結局約7471.25^m (2,264坪)あったことがわかる。また、「岡村(一宮村)久兵衛 神五分」とあり、どこかの神社(土佐一ノ宮?)の神主の分であったことがわかる。「大ツカ」の東・北にも田畑があったようであるが、一宮大塚古墳がこの辺では突出した目立った存在であったことが想像される。

ちなみに、同名の「大塚古墳」(正確には「伏原大塚古墳」というのが、旧香美郡土佐山田町楠目伏原大塚(現香美市土佐山田町)にあるが、こちらの方は、県内で唯一須恵質円筒埴輪が出土した方墳(竪穴形横穴式石室)であり、『土佐の三大古墳』はすべて純然たる横穴式石室を備えた古墳時代後期(6~7世紀)の大規模な古墳である。

一宮大塚古墳は、残念ながら、明治20(1887)年に新道(現国道32号の前身)が開設される際に取り壊され、750[㍎]ほど南西の鳥付川(現久安川、旧一宮村字米元)

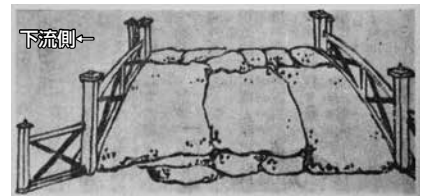
に架ける石橋用の石材として、本古墳の天井石が3枚はずされて700余人が運搬に当たって使用されたようで、そのため新橋は「太古橋」と名付けられた。ちなみに、古墳は、当時は大磐石(“塚穴”)と呼ばれていて、古代豪族の墓という認識は一応あったようである。従って、これを壊して橋の石材として使用するに当たっては賛否両論があったようであるが、近傍に石材が乏しかったため、止むを得ず使用したことが当時の新聞(『高知日報』,明治20年7月16日)の記事から読み取れる。

土佐を代表する歴史書の一つである『皆山集』(明治時代)によると、一宮大塚古墳の規模は、「高凡七尺奥行ハ五間余廣ハ凡七八尺許上に蓋す石(天井石)ハ五箇又左右二壁立する物皆一枚石ニて片方ニ三石宛左右六石也」とあり、高さ:約7尺(2.12[㍎])、奥行(玄室と羨道を含めた長さ?):約5間(9.09[㍎])、広さ(玄室の中?):約7~8尺(2.12~2.426[㍎])である。これを「土佐の三大古墳」と比較してみると、玄室・羨道の長さは、小蓮古墳で7.85,3.3[㍎](計11.5[㍎])、朝倉古墳で5.4,3.2[㍎](計8.6[㍎])と、長さの点で言うと小蓮古墳に次ぐ大きさである。天井石は5枚で、側壁は一枚岩で左右で6枚使用されていたことがわかる。

天井石の大きさに関しては、長さ・巾は12尺×9尺、11尺×8尺、10尺×8尺で、厚さは各々2尺余である(同上新聞)。

1尺は約30.3[㍎]なので、最も大きなもので3.63[㍎]もあり、相当大規模な古墳であったことがわかる。材質の詳細については解り得ないが、現在の新設の太古橋が架けられる際に川の兩岸の修復材として小さく割られたものの内で、橋の上・下流の両側の欄干に記念として残されている天井石の4個の断片(共に約40[㍎]角)からは、少なくとも淡黄褐色チャート、淡緑青色チャート(上流側)と灰緑色~淡黄褐色層状チャート(下流側)であったことがわかる。このうち、前者の方は、土佐神社楼門前の社格標に使用されているものの一部の色調と類似している。

天井石は、元々は5枚あったようで、残りの2枚のうち1枚は、江戸時代の嘉永4(1851)年に、土佐神社西側を南流して楼門前で合流するしなね川(旧名・



旧太古橋スケッチ



現太古橋(下流側)



★ 一宮大塚古墳 ※ 太古橋 ● 竈戸神社 ⊗ 巖島神社 ● 瀧宮



社格標

大谷川)に架かる橋に使用し、後の1枚は、前述のように明治20年の新道開通に際し楼門前の大宮橋(現在は暗渠)に架したようで、数十年前には石橋でできた“太鼓橋”があったという。後者の方は、大正3年の鉄筋コンクリート橋に拡幅する際に撤去したものを加工して楼門と橋の間に「社格標」として設置・使用したとされている。従って、現時点で一宮大塚古墳(天井石)の石材・規模等を推測する唯一の確かなものが「社格標」に見られるものであり、元々の大きさは不明ではあるが、現在の大きさだけからしても、たて2.22m、よこ2.86m、厚さ0.65mという堂々としたものである。材質はチャートで、色調は表面が淡黄褐色、裏面が灰色で一部に赤褐色な部分が付着しており、間に挟まれた部分は白色～一部乳白色である。

一方、現存する一宮大塚古墳の一部についてみると、国道32号のすぐ南の島崎歯科医院の敷地内に、巾2.2m、長さ約4.0m、高さ0.8mのこんもりとした小丘があり、大小いくつかの石材が残っている。高さがあまりにも低く、とても当時のままの古墳の一部という印象はなく、古墳のどこの部分に当たるのかすらもわからないほど破壊されている。ただ、ここで目を引くのは、小丘の南端に横たわるたて1.05m×よこ2.2m×厚さ0.3m大の緑青色チャートの平たい石材である。その大きさからして、玄室の天井石とは到底考えられず、また同じチャート質とはいえ、岩相(材質・色調)が他の天井石と比べ著しく異なり、またこの近辺ではあまり見かけない岩質のもので、5枚の大きな天井石が使用されていた玄室入口手前の羨道の天井石に使用されていた可能性が高い。玄室の側壁に使用するには厚さが薄すぎて天井石を支えきれず、問題の石材は、羨道の天井石と考えるのが妥当だと思われる。その場合、現存する古墳の一部は、南側に入口をもった古墳の羨道部分に当たるということが考えられるが、実際『皆山集』に、一宮大塚古墳に関して「入口は南にあり」という記述がある。本岩の北端に接して、幹回り約2.1mのエノキと同約1.5mのタブノキが合体した切り株が生えているが、その推定樹齢は100年程と考えられ、恐らく明治時代に古墳玄室の天井石が剥ぎ取られた後に生えてきた樹木であると考えられ、羨道の天井石と考えられる石材は、木の成長で南側に押しやられてずり落ちた格好になっている。ちなみに、現存する古墳の周辺に散在する石材は、露出するもので最大47×68mmの小片3個、材質は珪質岩～黄褐色チャートで、最大のもは、土佐神社楼門前の社格標のものと類似する。現存する古墳北端から約3.5mで国道

南脇歩道の側溝となっており、従って、玄室部を含む本来の古墳の大部分が破壊されていることになる。

一宮大塚古墳に使用されていた巨石の石材が一体どこからもたらされたのか(出所)についても興味があるが、これについては、古墳の東南東約1kmの所にある高知東高等学校グランド南東脇の竈戸神社を祀る荒神山^{やま}*1の可能性が一つとして考えられる。古生代バウム紀(高岡層)?の地層から成る低山で、赤褐色～灰白色チャートが露出する岩場に竈戸神社の他、稲毛神社・山神(“大山祇神社”)の計三社が祀られており、小祀の裏手には御神体とされる、たて1.6m、よこ0.8mの先の尖った円錐状の珪質岩～一部チャート質の岩体があり、その下三分の一には鏡面(“鏡岩”)が生じている。そして、さらにこの東側の岩場にも2～3の小祀があり、この山全体が古くから、石そのものが神(“石神・岩神”)として信仰された磐座祭祀^{いわくら}*2の対象であったことが伺われる。日本には、古来(縄文時代)より「自然の巨石・巨岩には神が宿っている」という“巨石信仰”があり、それに類するものであると思われる。さらに、明治時代に四国の地質調査に来たドイツ地質学者E.ナウマンの著の中で「鏡は、日本古来の宗教である神道において、古くからきわめて重要な役割をもっている。鏡のような岩(“鏡岩・鏡石”)に対しては、特に古代においては、宗教的なそして迷信的な観念が結びついていたのであろう。……」(1996,山下昇訳)と述べられているように、古代人(ここでは古墳時代)にとって「鏡」は神としての象徴であったと思われる。よく古墳内に副葬品として鏡を埋納したり、また神社の御神体として鏡が対象とされることは多い。



竈戸神社

「土佐の三大古墳」である小蓮古墳のように、巨岩や“鏡岩”の近くに古墳を築いたり、また朝倉古墳では玄室の壁に“鏡岩”を意図的に多く使用するなど、“鏡岩”をかなり意識していたことが伺われる。その点からすると、ここ荒神山の“鏡岩”も、一宮大塚古墳の被葬者にとっては関心の対象で、決して無縁ではなかったような気がする。そういう点では最も近い石材の産地としての可能性が高いが、このチャートは顕著な層状チャートで、単層間の結合力が弱く割れやすく、古墳の天井石に使用されていたものや現存する羨道の天井石と思われる石材の岩質・色調とは一致せず、少なくとも現況からする限りでは産地と断定するには無理があり、ここ以外の別の露頭に石材の出所を求めなければならない。次に、神社を祀る神聖な場所という観点からすれば、一宮大塚古墳の北北西約600mの高知自動車道すぐ南側の山麓にある巖島神社がある。ここには、社殿右横の神

社の御神体と思われる約6×10[㍎]の巨大岩体（ブロック）を含め、長径3～7[㍎]大のチャートの岩体が5体存在するが、いずれも灰～暗灰色の単色の層状チャートで、他の色調のチャートを伴わない。極めて緻密で“火打石”に最適な典型的なチャートである。しかも、地層が緩く褶曲し、層理面に直交する亀裂も目立ち、とても古墳の石材として使用できるような扁平で大きな石材は得られない。この点、一宮大塚古墳に近く、かつ地形的に運搬しやすいものの、天井石がここからもたらされたとは到底考えられない。

では、他の候補地として挙げられるのは、土佐神社北側の裏山が考えられる。土佐神社境内北端からは秩父累帯黒瀬川帯（旧中帯）と北帯の間の大断層に沿って貫入



した蛇紋岩が分布しており、その北側は小蓮古墳と同様のチャート、石灰岩を伴う古生代ペルム紀の白木谷層群の分布域（北帯）に属している。実際この地域にある「瀧宮」神

社背後（御神体？）とその社殿の周りには、長径が6～7[㍎]もある珪質岩～一部灰色～淡灰褐色チャート質の巨大岩体の転石が点在しており、かつてここに存在したこの種の岩体を古墳用の石材として利用した可能性は十分考えられる。実際、社殿背後の岩体は、灰色～淡黄褐色、一部灰白～乳白色の層状チャートで、層状が強いが色調的には土佐神社の社格標に使用されているものとよく似ている。また、これら岩体の中の一部には、上述の一宮大塚古墳の羨道部の天井石と思われるものと部分的に似た岩質のものもある。

石材の出所でこれら以外の可能性としては、一宮大塚古墳築造当時、当地が旧浦戸湾の奥部に位置し、水陸交通の要衝であったことからすると、より遠くの場所から石材を切り出し船（筏）で運び、岸に着いてから修羅で運んだこともあり得る。具体的には、当時古浦戸湾中に浮かぶ島であった比島・洞島ケ島・竹島〔秩父累帯中帯（黒瀬川帯）〕、さらにその南側の五台山（大島）〔南帯〕なども可能性として考えられる。特に、五台山北麓には土佐神社離宮、通称“小一宮（様）”と呼ばれる、かつて江戸時代に志那禰祭の際、土佐神社からの神幸があった御旅所（神輿の仮鎮座地、行宮）跡に祀られた神社があり、古墳時代まで遡るのか否かはわからないが、一宮神社と一宮大塚古墳との間には何らかの関わりがありそうである。実際、ここの本殿北隣には、“絶海和尚座禪の岩”と称される約5×6[㍎]のチャート質の扁平な巨石が露出してい



る。本岩に関しては層状を成し、色調は灰緑色～赤褐色～灰白色と一定せず、一宮大塚古墳の天井石に使用



されていた土佐神社の「社格標」に用いられているものにやや似ている部分がある。また、これより少し西方の五台山への上り口付近には、鏡面を有する淡黄褐色のチャートが分布しており、やはり土佐神社の社格標表面の特徴的なチャートの色調と似ている。“小一宮”が何故この場所に創建されたのか明確なことはわからず、また社殿近傍に神社の御神体としての“鏡岩”は存在しないが、社殿南には急崖が迫っていて、神社の立地としてはふさわしく、古墳の石材を調達するには十分な場所と言える。ただ、五台山山頂付近を形成する岩石も、珪質岩～一部チャートで、やはり一宮大塚古墳に使用されていた天井石の



岩質との間にやや類似性が認められるが、チャートは淡緑色で、土佐神社の社格標裏面を構成する灰色のチャートではない。一般に南帯のチャートには、あまり灰色チャートは伴われず、この点一宮大塚古墳に使用されていた石材の出所を南帯に限定するのには少し不安が残る。

古絵図〔例：『土佐日記地理弁』（鹿持雅澄）〕によれば、紀貫之の『土佐日記』の頃（平安時代：10世紀頃）には、比島・小津・葛島・五台山などは旧浦戸湾に浮かぶ島で、土佐神社のかつての鳥居や一宮大塚古墳のすぐ南まで旧浦戸湾の入り江が迫っていて〔図〕、一宮大塚古墳の西には、高鴨社（現土佐神社）の志那禰祭の際に神輿を乗せた船を繋げる“綱掛松”と呼ばれるものもあつたよう



である。いずれにしても、土佐神社への参詣道のすぐ西の小丘に一宮大塚古墳

はあつたということになる。土佐神社（旧土佐國一宮）の創建は、雄略天皇（5世紀後半）の頃とされ、一宮大塚古墳の被葬者は、雄略天皇時代（5世紀後半）創建とされる本神社の存在を当然意識してこの地に古墳を築いたと考えられる。一宮大塚古墳からは、明治期にその天井石を剥ぎ取った際、須恵器・鉄鏝とともに県内では唯一の馬鐸（馬の胸繫に掛ける飾り）が出土しており、このことから、被葬者は、当時の権力者であった土佐國の首長（国造）ではないかと考えられている。

『土佐の三大古墳』の立地場所については、朝倉古墳を除いては近くに“岩神様”を祀る珪質岩～チャートか

ら成る岩場があり、しかも“鏡岩・鏡石”が伴われる場所にある。朝倉古墳の場合は近くにそのような岩場はないが赤鬼山を御神体とする朝倉神社があり、古墳内には遠距離から調達したと思われる顕著な“鏡岩”を持つ石材を意図的に多数使用しており、三古墳ともに“神”を意識して構築していることが感じられる。一方、一宮大塚古墳の場合は、近隣に神を祭る岩場はないが、上述のように、古墳の石材を調達した可能性のある場所には、神は鎮座するが荒神山以外には“鏡岩（鏡石）”は存在しない。いずれにしても、これら巨大古墳に用いられている石材は、神が宿る神聖な場所から調達したのではないかという気がする。今回の調査の結果だけからすれば、南帯のチャートには灰色のものが伴わないこと、また、北帯のそれには淡黄褐色のものはあまり見かけないなどの整合性に欠けるが、一宮大塚古墳の石材（天井石）の調達場所は、消去法及び岩質の類似性からすれば、五台山北麓か土佐一ノ宮（土佐神社）北側の瀧宮である可能性が高い。ちなみに、一宮大塚古墳の石材を五台山から調達した場合、当然船（筏）を使用したと考えられるが、専門家の話では、石材を直接筏に乗せるのではなく、石材を修羅に積んだまま筏に乗せて運ぶのが一般的なようである。

一宮大塚古墳は、前述のように奥行きは11^m近くもあり、「土佐三大古墳」中最大の小蓮古墳と二位の朝倉古墳との間に位置し、被葬者の身分、古墳の規模ともに、土佐国一級の巨大古墳であったということになり、詳細な調査・記録がなされないまま破壊されてしまったことは甚だもったいなく残念だという気がする。ただ、古墳の極一部が現存する土地は、一時期宅地化される話も持ち上がっていたのを、現所有者である島崎氏が貴重な古墳を守り後世に残したいという思いから自ら土地を購入したという経緯があり、一市民の情熱により貴重な遺跡が完全に失われるのは免れたという結果に至っている。

一方、ドイツ人地質学者、E.ナウマンが明治時代に四国の地質調査で1883（明治16）年と1885（明治18）年の二度領石・佐川方面を訪れ、考古学に関しても造詣が

深かったため領石の古墳や朝倉古墳などの古墳も調査している。つい最近、大英博物館の「ゴーランドコレクション」の中から、ナウマンが同じ明治政府のお雇い外国人のウイリアム・ゴーランド^{※3}に送ったこれら土佐の古墳出土の土器群と2通の手紙が確認されたが、手紙には朝倉古墳の平面図も記されている。ナウマンは、第1回目の土佐訪問の1883年に、領石での地質調査を終え、一宮大塚古墳の東側の逢坂峠から南国市白木谷北西の「ガネ越え（蟹越）」に伸びるルートも地質調査で歩いていてスケッチも残している。そうだとすれば、ここ一宮から高知を経て佐川に向かう際、現在の国道32号の前身となったと思われる道（少なくとも一部は「一宮街道」）を通ったとすれば、高知市（江ノ口番所）で佐川方面へ向かう旧松山街道と合流することになる。ナウマンが明治時代に土佐に来た時は、まだ新道は開設（開通）されておらず、従って一宮大塚古墳はまだ破壊されていなかったことになり^{※4}、もしナウマンがこの道を通ったとすれば、道沿いにまだそのままあった巨大古墳・一宮大塚古墳に気が付かなかつたはずはなく、あるいは、今後の調査でそのことに関する新たな資料が見つかることも考えられる。土佐を代表する（する筈であった）“幻の巨大古墳”一宮大塚古墳の姿が遠からず蘇る日がくることを期待したい。

- ※1 「荒神」は民俗信仰の神の一つで、竈神として祭られる三宝荒神その他がある。
- ※2 「磐（いわ）」は“堅固”の意で、自然の巨石をさす場合が多く、神の宿る“神の御在所”とされる。
- ※3 明治政府がイギリスより大阪造幣寮（現造幣局）に招聘した冶金技師。日本の古墳研究の先駆者としても知られ、“日本考古学の父”と呼ばれる。登山家でもあり「日本アルプス」を命名。
- ※4 ナウマンが土佐に来た1883年の4年前から、新道の拡張工事が始まっていれば、一宮大塚古墳の天井石がすでに取り外されていた可能性もある。

〈協力〉本稿執筆に当たっては、土佐神社宮司・小笠原貴紀氏と高知県立歴史民俗資料館副館長・岡本桂典氏から情報・資料の提供を受けた。また、元高知県文化財課の山本哲也氏からは色々和教示を得た。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館 学芸員）

“生きた化石” — 古代植物 —

安井 敏夫

地球上には、レリク（^{ざんぞんしゅ}残存種）または“生きた化石”と呼ばれる生物がある。地質時代に地球上の広い地域に数多く分布して化石として見つかるが、現在では限られた狭い地域にほとんど進化せずにはほぼそと生存・生育しているものをいう。動物ではシーラカンスやオウムガイなどが有名で、植物ではメタセコイアやイ

チョウなどがある。特に植物では、私たちの身近には、“生きた化石”としての古代植物（化石植物）が結構あることに気付く。以下にその代表的なものを紹介することにする。

●メタセコイア

スギ科の落葉針葉樹で、秋にレンガ色に美しく紅葉



するところから、別名「曙杉」^{あけぼのすぎ}ともいう。1943年に中国四川省で現生種が発見され、現在地球上では同省と湖北省にしか自生していない。化石は、最も古いもので中生代白亜紀から見つっているが、新生代第三紀には世界中に広がり、各地に森林を形成した。

日本の古第三紀の地層（石狩炭田・常磐炭田）からもみつき、かつては日本列島にも自生していたことがわかるが、第四紀初期の氷河時代には絶滅したと考えられていた。雌雄同様で生長が早く、また挿し木でも増えることから、日本では公園や街路樹として栽植され、よく学校の校庭などにも記念植樹される。横倉山自然の森博物館の進入路両脇にも並木として植わっていて、春の新緑、秋の紅葉が美しく、よく見物客が訪れる。

●イチョウ(銀杏)

イチョウ科の落葉高木で、中国原産。恐竜が栄えた中生代ジュラ紀（約1億5000万年前）にはすでに存在していて、次の白亜紀にかけて大繁栄した。雌雄異株で、雌株には秋に黄色の種子が実り、その核が“ギンナン”で食用に処す。よく老木では、根本付近の枝の表皮が長く垂れ下がって老婆の乳房のようになり“乳イチョウ”と称されるが、この場合は雄株である。特筆すべきことは、花粉から精子を生じて受精するなど、古代植物の形質を有することである。



メタセコイア同様、秋の黄葉が美しいためか、公園に植えられたり、学校の校庭に記念植樹されることが多い。高知市内では、高知城入り山と追手前高校で並木が見られるが、後者の方は防火の意図があるのかもしれない。というのも、イチョウは火災の際水分を放出する性質があると言われているからである。また、藩政時代には、籠城の際の食糧とするために城郭内に植えられたといわれている。

材の用途としては、寿司屋のまな板などに使用される。

《モクレン科の植物》 ホオノキ・オオヤマレンゲ・ハクモクレン・コブシ・タムシバなどのモクレン科の植物は、地球上で恐竜時代に最初に花を咲かせたといわれ、被子植物で最も古いグループに属する。つまり、恐竜も見た植物ということができる。

●オガタモノキ(小賀玉の木)

西日本に生息する国指定 特別天然記念物・ミカドアゲハ(帝揚羽・アゲハチョウ科)の食餌植物。現

在、神殿に供えたり神事に用いられた櫛^{さかき}(ツバキ科)の代用とした。古来より神事に用いたため、現在でもよく神社境内に植えられているのが見られ、高知市内では、潮江天満宮(天神町)・要法寺(筆山町)などは「ミカドアゲハの生息地」となっている。

和名は、「^{おが}拝み^{たま}霊」「^{おきたま}招霊」からの転訛といわれ、枝葉を神前に供えて神霊を招くのに用いられる。

■ホオノキ(朴の木)

日本特産。材は軽くて柔らかく加工しやすいため、版木・下駄・器具(包丁・鎌など)・日本刀の白鞘などに用いる。

葉が異常に大きいため、古くから食物を器の代わりに盛ったり包んだりするのに用いられてきた。信州や飛騨高山などでは、今も味噌を乗せて炙った「朴葉味噌」がある。和名は、葉で食物などを包むことを意味する「^{ほう}包の木」が語源とされる。



●オオヤマレンゲ(大山蓮華)

奈良県南部の高峰山に自生していて、蓮華(ハス)の花に似た白い花を咲かせることに由来。別名「ミヤマレンゲ(深山蓮華)」。

朝鮮半島・中国にも分布。よく茶花としても用いられる。

●コブシ(拳)

果実が集合果で、握り拳^{こぶし}のように見えることに由来。遠目にはハクモクレンに似ているが、よく、山に春を告げる白い花が「タムシバ」、里に春を告げる白い花が「コブシ」と言われる。

よく街路樹として植えられ、花は香水の原料にする。

●ハス(蓮)

1951(昭和26)年、千葉県の落合遺跡〔弥生時代〕で発掘された、今から2000年以上前のハスの実から発芽・開花したハス(“古代ハス”)は有名。



発掘に当たった植物学者でハスの権威でもある大賀一郎の名をとって「大賀ハス」と命名された

高知では、土佐市蓮池や南国市十市などでハスの群生が見られる。

● スイレン（睡蓮）

スイレン科スイレン属。

日本には「ヒツジグサ」の1種のみが自生。花はハス（蓮）に似て水面上に開き、朝夕開花する（昼咲き種と夜咲き種がある）。

フランスの画家、クロード・モネによって描かれた『睡蓮』が有名。

ちなみに、ハス（蓮）はもう少し進化した種類に属する。

● ソテツ（蘇鉄）

漢名が変わっているが、それは個体が衰えた時に幹に鉄釘を打ち込んだり、鉄類を根元に与えると蘇って元気になると言われていることに由来する。

ソテツ科の裸子植物で雌雄異株であるが、共に花を咲かせる。南国をイメージする植物で、イチヨウと同様に最も原始的な植物（木本類）の一つとされ、精子によって繁殖する。幹の表面は、葉が落ちた跡（葉柄痕）で覆い尽くされている。ちなみに、高知市追手筋の中央分離帯に植えられている並木は、同じ“生きた化石”のヤシ科植物のカナリーヤシ（別名：フェニックス、被子植物）であるが、同じような幹をしている。

生命力の強い植物のためか、種子（有毒）・葉・茎・花・根などすべての部分に薬用効果があるとされ、中国では漢方薬として用いられている。例えば、

葉には止血・解毒・止痛の、根には腎臓機能を高める効果

があるとされる。高知でも、よく武士や医者の家などに植えられているが、このような薬用効果があるためだろうか。高知市大川筋の武家屋敷内には見事なソテツの老木がある。



■ ヒカゲノカズラ

シダ植物、コケ植物の歴史は古く、前者は4億数千万年前の古生代シルル紀に、後者は3億数千万年前のデボン紀後期に出現する。地球上に最初に陸上植物が現れたのがシルル紀のプシロフィトンという原始的な植物ではあるが維管束を持っていた。

横倉山からも見つかっている日本最古の植物「リン木（鱗木）」もデボン紀後期（約3億6000万年前）のヒカゲノカズラ類に属する木本性シダ植物である。

● トクサ（砥草）

トクサ目の常緑性シダ植物で、よく庭園などに観賞用として植える。茎が硬くて中空で、縦の溝があつてざらざらしている。そのため、茎をゆでて乾燥させた

ものはさらに硬くなり、乾燥させて木製器具（竹製の茶杓など）・角・骨などを研磨するのに用いられる。砥石となる草という意味で「砥草」と名付けられたようである。



■ カツラ

カツラ科、雌雄異株で雄株に雄花、雌株に雌花を別々に咲かせる。カツラ属1属のみの日本固有種で、現在地球上では日本にしか見られない。化石としてはかなり古くから知られており、中生代白亜紀には北半球のあちこちで知られ、次の新生代第三紀にはさらに広がったようである。しかし、この時代の終わりとともに衰え始め、次の第四紀（“人類紀”）になると、アメリカやヨーロッパでは見られなくなった。

横倉山の安徳天皇行在所跡に2本のカツラの巨木が、空池と住吉の分岐点にも巨木が見られる。

葉はハート形で、黄葉した葉にはほのかな香りがあり、別名「香の木」という。材は緻密で腐食しにくいので、家具材や漆器の一種である鎌倉彫（ホオノキやヒノキなども用いられる）などの彫刻材や和楽器（木琴など）、鉛筆、また碁盤などの材としても用いられる。

■ クスノキ（楠）

クスノキ科の植物は、化石としてよく見つかり、中生代白亜紀に現れ、次の新生代第三紀の主要植物の一つだった。恐竜は白亜紀末に絶滅したが、クスノキ科の植物は生き残ったことになる。

葉や材からは殺虫剤のショウノウが採れ、防湿性があり虫に喰われないので、古い飛鳥時代の仏像は楠製のものが多い。社寺境内には樹齢数百年から一千年を越す大木が残り、高知潮江天満宮の鏡川南岸には推定樹齢400年の大クス〔高知市指定保護天然記念物〕があり、高知ではよく街路樹として植えられている。

● コウヤマキ（高野槇）

スギ科の常緑針葉樹で、1属1種の日本特産種。真言宗総本山・高野山に多く生えていることに由来し、本州中部以南（福島県以西）の山地に自生が限られる。中生代三畳紀～白亜紀には北半球を中心に世界的に繁栄したものと考えられるが、北アメリカでは新生代新第三紀に、ヨーロッパでは第四紀更新世に絶滅し、現在日本と韓国済州島のみに残存。

高野山を中心に、よく京都などでは仏前に供える花（仏花）の代用として用いられる。また、古代には、棺材としては最高級品で、弥生時代や古墳時代には木棺として用いられた。

〔註〕 ■印は横倉山でも見られるもの

（やすいとしお／横倉山自然の森博物館 学芸員）

博物館行事

企画展：『宇宙のとびらをあけて』

2019年2月9日(土)～4月7日(日) [協力：星のかけら Project・佐川星を観る会・山村自然染校しももの郷]

高知県ゆかりの天文愛好家たちが撮影した天体や星空の写真展。

八重山の星々、南十字星、オーロラ、星雲(銀河)などの写真の他、クロメリン彗星の発見により日本初の彗星発見者となった故・山崎正光氏(佐川町)の紹介。これまでにない、月・木星・火星などを球体に投影して立体的に映し出す「ダジック・アース」(Dagik Earth)は迫力があり感動的であった。

企画展：西峯久美染色展

『水色を配する～草木染めの物作り』

2019年4月27日(土)～6月2日(日)



素朴であっさりとしているながら上品な色合いの草木染め。その魅力ある染色技法・作品は今なお多くの人々に人気がある。

今回身近な植物で染めたインスタレーション、藍の草木染めを主に、今回のテーマである「水色」(沈殿藍によるブルー)にちなんで、清らかな水色をモチーフにした作品を中心に、タペストリー、オブジェ、ストールなどの手軽でお洒落な作品を展示。特に今回は、牧野富太郎博士が「横倉山にしかない」という珍しく貴重な「ヤマアイ(山藍)」を「仁淀ブルー」で有名な池川川の清水で染めた作品も展示。草木染めの上品さ、芸術としての作品を観ていただく。

期間中、ワークショップとして「ヤマアイ(山藍)による摺衣体験」を行う。

主な感想として、「草木染めの色は暖かく優しい」「草木染めの優しい色合い、ナチュラルな感性に癒されました」「色が美しかった。仕事が丁寧だった」などがあつた。

企画展：『第41回 高知県写真家協会展「土佐」』(選抜移動展)

2019年6月15日(土)～6月30日(日)

本企画展は、令和になって初めてのものとなり、正に時代の変換期に開催される写真展となった。移りゆく郷土高知の風物・文化・生活・自然などを被写体にし、記録として残していく作品86点が集まった。これからは、また新たな時代のスタートであるとともに、昭和・平成がまた遠ざかり懐かしくなっていく。

「越知中学生職業体験」

2019年7月2日(火)～4日(木) [指導：学芸員 谷地森秀二、生徒：3年生女子]

『私の将来の夢は動物に関わった仕事をするので、少

しでも動物のことが学べるかなと思い職業体験で横倉山自然の森博物館を選ばせていただきました。職業体験が始まって初めの方は、私が見知りでうまく職員の方と話すことができませんでしたが、皆さんとてもやさしくおもしろい方たちばかりですぐに話せるようになりました。3日間で体験したことはほとんどがイスに座ってやる小さくて細かいものばかりでしたが、一つ一つの作業が大切ですごく神経を使い、博物館で働く方の苦労を実感しました。学芸員さんが私の将来の夢につながる話をたくさんしてくださったのですごく勉強になりました。普段、職員の方しか入ることのできない大切な収蔵庫に入れてよかったです。3日間ありがとうございました。体験したことをこれからにいかしていきます。』

今回は、ミュージアムショップの棚卸しと標本整理・登録作業をしてもらった。

夏休み企画展：

『越知のおかいこさま～昭和の越知を支えた養蚕業～』

2019年7月20日(土)～9月8日(日)

明治～昭和にかけて越知町の一大産業である養蚕業及び製糸業。町内には「四国一」とも言われる製糸業に関する資料を展示する「蚕糸資料館」がある。今回そこに展示・保管されている展示物を中心に、越知の養蚕業の歴史を紹介する企画展を開催。何の変哲もないカイコガ科の蛾の幼虫が繭を作るために口から吐いた極めて小さな糸(繭糸)から日本が世界に誇る「日本の文化」を代表する煌びやかな「絹織物(着物)」が生まれる過程を是非知っていただきたいという願いもあった。

期間中、かつて地元で養蚕業に携わった方(3名)による「座談会」、機織りをやっていた方の指導による「機織り体験」などが行われた。

————— 《関連イベント》 —————

●《座談会》「蚕と暮らした日々」

2019年8月4日(日) [話し手：狩野 栄・所谷 マチ子・宮橋和代(越知町)]

養蚕をやっていて苦労したこととして、「稲作の仕事と養蚕とがかち合うので大変だった」「蚕が病気にかからないように気を使った」などがあり、養蚕を止めたきっかけは「ショウガが流行ってきたから」にあるようである。そうは言っても、大正時代には米一俵が6円であった頃、養蚕で年間1万円もの現金収入があったようで、いかに養蚕が花形であつて、正に「おかいこさん」と呼ばれたかがわかる。



● 《機織り体験》

2019年8月25日(日)〔指導：所谷マチ子〕

「七夕」の起こりは“棚機”にあり、機織りの道具を具した飾りを吊って、機織りの上達を祈ったという。

「機織り」は、織る前の“糸通し”の作業が大変で、綜絢の小さな穴に一本一本たて糸(今回624本)を通すのに20日ほどかかるようで、この作業が終われば“終わったも同然”という。今回は、二段に張ったたて糸(経糸)の間によこ糸(緯糸)を杼を滑らして通して織る「平織」の体験を行う。



「おもしろい」(小学生・女)、「将来機織り機を買って実際に織ってみたい」(中学生・女)、「自分たちは出来上がった衣類を着るのでプロセスがわからないが準備に時間がかかり、布地を織る時間が大変だと実感した」(高知市在住フランス人)などの感想があり、貴重な体験ができたようであった。

企画展全体に関する主な感想として「内容、ボリューム、サウンド(音)、おもてなし全て良い」「高知で蚕が見られるとは思っていなかった!」「蚕が越知でこのような歴史があったことを知らなかったので凄く良かったです」「養蚕について詳しく知らなかったのもとても良い機会になった」「映像資料が良かったです」「蚕の一生のDVD映像が印象的だった(脱皮～産卵などの一生のサイクルがわかりやすかった)」「蚕の一生、蚕が糸を作るところ、蚕の糸で作った着物などが印象に残った」「全て良かったと思います。ビデオを流していること、特に今は亡き母の写真を見られたこと」「はたおり体験が大変良かった」などがあつた。

夏休み博物館教室『オリジナル万華鏡作り』

2019年8月18日(日)〔講師：橋本 優(日本リサイクル万華鏡協会)、参加者：午前の部 小学生10名、午後の部 小学生6名〕

すっかり定着し恒例となった、刻々と模様に変化していく動きのある「万華鏡作り」。いつもそれぞれ違ったオリジナルな夢のあるものができて、一



向に飽きない。残った時間で、CDを使ったコマ作りを行った。

子供たちからは「楽しかった」を筆頭に、「不思議な模様がいっぱいあってきれいだった」「万華鏡の中の光(輝き)がきれいでした」、保護者からは「作ることで色んな発見もでき、子供にとってもいい体験ができました」「親子で一緒に何かを作る機械が普段あまりないため、今回の製作活動大変良い体験となりました。いつも目にする万華鏡と少し違った物を作れたのも楽しかったです」などの感想があつた。



夏休み博物館教室『勾玉作り』

2019年8月24日(土)〔講師：江間盛男(公益財団法人高知県文化財団 埋蔵文化財センター)、参加者：小学生4名〕

恒例となった「勾玉作り」。古代人の装飾として用いられ、形や材質にはいろいろあるが、例年オーソドックスな“胎児形”を一番柔らかい滑石で作る。生徒からは「楽しかった」「まが玉を(丸く)削るのが少し難しかった」、保護者からは「勾玉の由来や材質などの説明があり、子供にも私自身にも新たな知見がありました。勾玉作りは、大人がはまる面白さがありました。時間を忘れる楽しさでした。…」などの感想があつた。



『夜間昆虫観察会『天蚕(ヤママユ)を呼ぶ』(博物館3F展示ロビー)』

2019年8月24日(土)〔講師：真鍋泰彦、参加者：十数名〕
あいにくの雨のためもあつてか、クワコは見られたが、ヤママユは来なかった。

友の会だより

「講演会：NPO 法人みんなでつくる自然史博物館・香川『自然史博物館は何を生み出せる?』と「香川県立ミュージアム特別展視察」研修

2019年5月26日(日)〔参加者：7名(内事務局1名)〕
大阪自然史博物館の歴史と現状、活動報告等を聴く。

「おちぞら★夏の星観察会」

2019年9月3日(火)〔講師：尾崎知子(事務局)〕
雨上がりの曇り空から一転して晴れ間が広がり、美しい夏の星々が夜空に煌めき、その中の三輝星“夏の大三角形”

(ベガ・アルタイル・デネブ)とその一角にある白鳥座を観察する。続いて、一際大きくオレンジ色に輝く木星と土星を屈折望遠鏡で観察する。小さいながらも、木星本体と四つの衛星がはっきりと、また土星の環(リング)もかすかに観られ、遙か宇宙の魅力を体感することができた。

「西予市野村シルク博物館視察研修」

2019年9月13日(金)〔参加者：21名(内事務局3名)〕
明治初期に始まり、大正初期に大いに栄えた愛媛県野村町の養蚕。肱川の清らかな水と高度な製糸技術によって生

産された生糸は、「カメラア（白椿）」の商標で大洲市の繭市場に降ろされ、国内外で高い評価を得て、野村町の産業経済の発展に大きく貢献したという。野村町で生産される『伊予生糸』は、白椿のような気品のある光沢とふんわりとした柔らかさを持ち、古くから高品質の生糸として有名で、伊勢神宮の式年遷宮や皇室の御料として用いられ、また国会議事堂衆議院の貴賓室のテーブルクロス、能装束の復元、さらには、英国エリザベス女王戴冠式の衣装にも採用されたそうである。



今回は、シルク博物館の展示の観覧と、隣接する製糸工場を視察する。館内の展示では、着物（和服）1着

分の生地（1反）を仕上げるのに、2600粒（5^キ）もの繭を要するというのが実地見分しての一番の驚きであった。工場では、多条繰式繰糸機を使った繰糸作業を視察したが、工女の目で注文に応じた繭の数を計りながら、技術と経験で小枠に巻き取っていく作業には、匠としての技のすばらしさを痛感した。この貴重な技術の歴史、西日本唯一の製糸工場の操業・絹糸の生産が末永く後世まで継承されていくことを願いたい。

「神無月 蛾類・鼯鼠観察会」

2019年10月14日（月・祝）〔指導：谷地森秀二（事務局）参加者：10名（内事務局3名）〕

杉原神社のムササビの声は聞かれたが、コウモリは捕獲できなかった。

横倉山ミニ歳時記

■モリアブラコウモリ *Pipistrellus endoi*

4月から、横倉山の哺乳動物調査を始めました。月に一度、自動撮影装置を使ってタヌキやイノシシなどの地上をうろつく中大型動物を狙ったり、生捕りワナを使ってネズミやモグラの仲間を捕まえたりしています。今回は、6月に行った調査でとても珍しいコウモリを見つけましたので紹介します。

6月の調査は、6月17日から18日にかけてコウモリの捕獲調査を行いました。その結果、高知県内ではこれまで津野町の天狗高原でしか見つかっていなかった「モリアブラコウモリ」を捕獲することができました。このコウモリは、四国内では高知県の他に愛媛県と徳島県で見つかっていますが、いずれも高い山の上（標高1310～1430m）のブナやミズナラなどの落葉広葉樹林での記録です。しかし、今回モリアブラコウモリが捕まった場所はシイやカシなどの常緑広葉樹林内で、標高は591mでした。モリアブラコウモリは、全国的に情報が少なく、まだわからないことが多いコウモリです。今回の記録は、モリアブラコウモリの生活を知る新たな手掛かりになりそうです。



【博物館日誌（抄）・令和元年度博物館行事】

- 2019年2月9日（土）～4月7日（日）
企画展：『宇宙のとびらをあけて』
- 3月26日（火） 博物館協議会
- 4月27日（土）～6月2日（日）
西峯久美 草木染展
『水色を配する～草木染の物作り～』
- 6月15日（土）～30日（日）
第41回高知県写真家協会展『土佐』（選抜移動展）
- 7月20日（土）～9月8日（日）
夏休み企画展
『越知のおかいこさま～昭和の越知を支えた養蚕業～』
- 8月18日（日）
夏休み博物館教室：『オリジナル万華鏡作り』
- 8月24日（土）
夏休み博物館教室：『勾玉作り』
- 9月28日（土）～12月1日（日）
秋季企画展：『懐かしい昭和のレトロ展 PartⅢ』

- 12月21日（土）～令和2年2月2日（日）
越知小学校総合学習展示・発表
「よこじろーとわたしたちの1年間」

【博物館友の会「フォレストクラブ」・令和元年度活動】

- 4月26日（金） 友の会交流会
- 4月29日（月・祝） 横倉山登山 ～春の四国のみちを歩く～
- 5月25日（土） NPO法人みんなで作る自然史博物館
香川記念講演研修
- 5月26日（日） 友の会運営委員会
- 6月1日（土） 仁淀川水質調査／友の会総会
- 7月3日（水） 横倉山ヒメボタル観察会（中止）
- 9月3日（火） 夏の星空観察会
- 9月13日（金） 野村シルク博物館視察研修
- 9月19日（木）・10月14日（月・祝） 横倉山コウモリ調査
- 10月19日（土）・20日（日）〔一泊二日〕
「淡路・和歌山」視察研修
- 2020年1月1日（水・祝） 初日の出を横倉山で

お詫びと訂正

『不思議の森から Vol.40』に誤りがありましたので、ここにお詫びして訂正いたします。
「高知県に落下した隕石」(p5) ②「高知隕石」の写真提供（誤）高知市立自由民権記念館 →（正）高知市 民権・文化財課

高知県越知町立

横倉山 自然の森博物館

THE YOKOGURAYAMA NATURAL FOREST MUSEUM, Ochi

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.lg.jp/

- 開館時間：午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日：毎週月曜日（祝日の場合は翌日）
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料：大人……………500円（※各20名以上）
高校・大学生……………400円（上の団体は小・中学生……………200円 100円引き。）
- 越知への交通
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知
JR普通 約50分

